

文 教 委 員 会

令和7年8月27日 ～ 29日

広 島 県

広 島 県 広 島 市

兵 庫 県 姫 路 市

委 員 長	田 島 寛 之	副委員長	竹 内 進
委 員	田 村 ひろし	委 員	林 あきこ
委 員	所 隆 宏	委 員	大 橋 美枝子
委 員	金 井 しげる	委 員	藤 澤 進 一
委 員	島 村 和 成		

令和 7 年度 文教委員会 所管事務調査報告書

1 日 程

令和 7 年 8 月 27 日（水）～ 29 日（金）

2 視 察 先

広島県、広島県広島市、兵庫県姫路市

3 調査項目

（1）「ことば科」の取組みについて（広島県）

《視 察 先》

広島県立広島中学校・広島高等学校
（施設所在地：広島県東広島市高屋町中島 31-7）

〔学校の概要〕

- （1）創 立 平成 16 年 4 月 1 日
- （2）生 徒 数 中学校 479 名（各学年 4 学級）
高校 665 名（各学年 6 学級）

《視 察 日》

令和 7 年 8 月 27 日（水）

《広島県立広島中学校・広島高等学校の取組み》

グローバル時代に必要な論理的な思考力や表現力を育むためには、各教科の核となる言語運用能力を育てることが重要との考えから、平成 16 年の開校以来、その中心的な役割を担う教科「ことば科」を中学校へ特設。平成 23 年からは教育課程特例校の指定を受け研究を進めており、令和元年には、教育における優れた業績と貢献が認められ、博報賞（公益財団法人 博報堂教育財団）を受賞した。

《委員・会派の所感》

- 東広島市にある中高一貫校である「広島県立広島中学校・広島高等学校」で実践されている「ことば科」について視察した。

通信方法の格段の進歩と A I をはじめとする科学技術の普及を起因とした人間の「考える力・伝える力」の大きな後退が今日的課題ともなっている現代社会において「論理的な思考力・表現力」を育成することを目的として、広島県では「ことばの教育」が推進されている。その研究校として、本校では生徒同士のディベートを主体とし、地図や新聞記事、あるいは視覚要素やグラフなどの教材を用いて、目の前の課題や着眼について、積極的に自らの考えを構

築し、理論形成したうえで意見として相手に説明する、そして共感を得ることへの努力工夫を重ねている。「ことば」を表現するための探求心と相手の理解を得るための持続力を養う教育は全教科にあてはまり、結果として全体的な成績向上にも寄与しているとのことであった。

人間としての特異性能力である言語の発達により、コミュニケーション能力がアップし、自分自身の潜在的な能力を引き出すことにもつながるものと思われる。今回の視察を通じて改めて「ことば」の魅力と実力の大切さを再認識した。

- 広島県立広島中学校・広島高等学校は県の教育を先導する役割を担い平成16年4月に設立され、開校以来中学校に「ことば科」を特設し、グローバル時代に必要な「世界中の誰とでも、相手の立場や考えを大切にして『ことば』によって伝え合う力」を育む教育に取り組むと共に、高等学校の「総合的な探求の時間」に接続し、6年間を通して計画的・継続的に「論理的な思考力・表現力」の育成を図っている。

中学校での「ことば科」の授業時間数は各学年60時間で、〈論理〉と〈ロジカルコミュニケーション〉の2つの領域で校正されており、第3学年時には英語でのディベート大会を行える力を育むカリキュラムとなっている。視察させていただいた中学1年生の〈論理〉の授業「情報を読み解こう！」では、広島市の今昔マップ6枚を古い順に並び替える課題で、資料（地図）の中にある情報を読み取りまちの変遷の歴史と照らし合わせて、「なぜこの順番だと言えるのか」生徒各人が理由を論理的に整理し、それをことばにしている姿を見ることが出来た。また、高校卒生全員が作成する「卒業論文」を拝見したが、様々なテーマで、論題について資料を活用しながら、問題を多面的に考え、自分の考えを明確にして表現できる力を育てていることが感じられた。

一方、寄宿舍も併設されており県内広い地域から受験に合格した意識の高い生徒が集まっているのは間違いないが、それでも不登校となる生徒が一定数いると伺い、この問題の難しさを改めて感じた。

- 今回視察した広島県立広島中学・広島高等学校は、平成16年より「ことばの教育」を推進してきた県を代表する中核的存在とのことであり、そのカリキュラムの内容や実践風景実態を視察することができた意義は大きい。

実際の授業風景では、生徒はグループに分かれ広島市の過去の地図を年代順に番号を付けるなどしながらお互い熱く議論し合い、その過程で論理的な思考力や表現力が身に付くという正にロジカルコミュニケーションの場面を垣間見ることが出来た。そもそも中学校学習指導要領総則でも学習の基盤となる資質・能力の筆頭として「言語能力」が挙げられており、どの教科でも「ことばを操れる言語能力」を育成する必要はあり、当校の取り組みには評価すべき点が多い。

ただこうしたカリキュラムを実践できる教員側の指導力が問われるところであり、個々の生徒の学習能力を引き出し、水準を見極め、適切なタイミングで介入しなければならない教員側の力量と経験に頼らざるを得ないと痛感した。

- 県立広島中学校・高等学校は、平成16年4月に併設型の中高一貫型の教育校として中高共に新設で開校。広島県ではことばの教育を推進しており、国立教育政策研究所の教育課程研究指定校としてことば科の取り組みを始め、平成19

年4月には文部科学省より研究開発学校の指定を受けことば科の取組みを継続。平成27年3月高校に於いてスーパーグローバルハイスクールの指定を、令和3年4月からスーパーグローバルハイスクールネットワーク参加校としてグローバルリーダーの育成を担う。令和7年4月からは文部科学省によりDXハイスクールとして高校が指定を受け国際化・情報化にも努め、広島県の言葉教育の中核的存在として、言語運用能力についての研究実践を積み重ねてきた。

持続可能な社会の構築に貢献できるグローバルリーダーの育成を教育目標に、中学校でのことば科の取組みから、高校の特徴的な取組みでもある、それぞれに興味があるテーマを一人一テーマ設定し一年間かけて研究に取り組む課題研究、卒業論文に繋げるレベルの高い教育を柱に、全ての教育活動を通じて教育目標の実現を図ってきたとのこと。

視察では中学校のことば科に特化した授業を拝見し、資料を分析し情報を読み解く課題として、6種類の同じ場所の地図を古い順に並び変える取組みはゲーム感覚を踏まえ、見ているこちらにも楽しく思えた。資料をヒントにそれぞれの年代を考えていく段階においては、生徒間でその根拠も含め活発な議論が展開されとても興味深いものであった。

- 併設型の広島県立広島中学校・広島高等学校を訪問し、21年前に設立された学校の歴史、「ことば科」の概要説明を受け授業（社会科）を参観した。中学校1年生は定数160名だが広島全体から約500名の受験者があり、中・高生の学生寮は定員130名で敷地内にある。校舎は中学校と高等学校の棟が廊下を通路として建てられている。図書館も充実し司書が配置されている。

「ことば科」は、教科書にはない考える教材が工夫されている。生徒に考えさせる図を副校長先生から示されその場で考えてみたが、残念ながら私は回答できなかった。また、iPadは授業によって使い分けており参観した授業ではまったく使わなかった。

「ことば科」のまとめとして、中3で意見発表弁論大会を行い、高3で卒業論文を書くという目標を持っている。「ことば科」は考える事を最も大事にしているとうけとめた。

「ことば科」は年間60時間、英語が35時間、他の教科は各5時間という配分。参観した授業は、広島市の古い地図から最近の地図まで6枚を年代別に並び替える問題で、子どもたちは4人グループで、それぞれ意見を出し合い発表した。次に間違いを見つけ再度訂正するという展開であった。4人全員が地図の特徴を確認しあい意見交換する活発な姿に、日頃の授業の成果を実感した。公立中学校すべてでこのような授業をすすめることができるかは大きな課題である。

- 今回の視察では、広島県立広島中学校・高等学校における「ことば科」の取組みについて学ぶことができた。私自身、かねてより「読解力は全ての教科に繋がる」と考えており、委員会でもそのように発言してきた。社会人生活を通じて、論理的に物事を伝える力は円滑なコミュニケーションやビジネスの成果に直結する。学生時代から体系的にその力を鍛えることは、学力向上にとどまらず、将来社会で活躍するための基盤形成として極めて重要であると改めて実感した。

当日は「情報を読み解こう」と題した中学1年生の授業を参観した。生徒

は地形図を比較し、事実と意見を峻別しながら根拠を提示する活動に取り組んでおり、単なる知識習得にとどまらず、論理的な説明力の育成を重視していることが印象的であった。また、同プログラムは中学段階の「ことば科」を高校での「課題研究・卒業研究」へと段階的に接続させており、6年間を通じた一貫したカリキュラム設計が特徴である。中学3年での弁論大会や高校での卒業研究は、その集大成として位置づけられている。

さらに、英語によるインタビューや海外研修といったグローバル教育との連携、ICTを活用する工夫、教員研修や公開研究会による継続的改善の仕組みも整えられていた。読解・表現力の強化が数学や理科の学習にも波及効果をもたらすとの報告もあり、基礎学力の底上げに直結する点が注目される。江戸川区においても、こうした体系的な言語教育の取組みを参考にしながら、子どもたちの学力と表現力を総合的に伸ばす施策を検討すべきと感じた。

(2) 少年の非行問題等に係る行政と警察の連携について（広島市）

《視 察 先》

広島市（市役所所在地：広島県広島市中区国泰寺町 1-6-34）

〔広島市の概要〕

- (1) 人 口 1,169,724 人（男 565,505 人、女 604,219 人）
- (2) 世 帯 数 587,181 世帯
- (3) 面 積 906.69 k m²
- (4) 予 算 額 7,228 億 5,133.6 万円（令和7年度一般会計当初予算）
- (5) 議員定数 54 人

《視 察 日》

令和7年8月28日（木）

《広島市の取組み》

平成27年4月1日に「少年サポートセンターひろしま」を開所し、少年の非行問題全般、少年犯罪に関する相談を受け付け、広島市と広島県警が連携して、非行防止から立ち直りまでの一貫した支援を行っている。

《委員・会派の所感》

- 少年の非行問題全般、少年犯罪に関する相談を受け付け、広島市と広島県警が連携し、非行防止から立ち直りまでの一貫した支援を行う目的で設立された「少年サポートセンターひろしま」を視察した。

サポートセンターとしては、電話や面会等により非行や犯罪被害など少年に関する相談を受け、関係機関と連携した対応を行うなど、問題の解決策を一緒に見つける少年相談、補導された少年や、犯罪の被害を受けた少年及びその保護者に対して、関係機関やボランティアと連携して各種体験活動を行う「少年サポートルーム」を開催するなどの少年の居場所づくり、非行などの問題を抱えた少年に就学や就労に向けた手続き等のサポートを行うほか、ボランティア等による学習支援を行い少年の立ち直り（復学、進学、就職など）をサポート

する立ち直り支援、問題を抱える学校にスクールサポーター等を派遣し、少年の非行防止や学校支援に取り組む学校支援制度の充実などを主たる目的としている。

非行に対しての取組みは勿論であるが、特に注目すべきは、市と県警という異なる行政組織が共に問題解決に取り組むための体制を築いていることである。社会問題解決の為にこういった関係性、組織体制を構築する事例というのは非常に参考になる点であった。

- 広島市（市教育委員会）と広島警察が綿密な連携をとり、非行防止の総合的かつ効果的な施策を推進するため「少年サポートセンターひろしま」を平成 27 年 4 月に設置し、非行防止から立ち直りまで一貫した支援をワンストップで行っている。広島市の他に福山市にも設置され、設置予定の東広島市と合わせて県内 3 カ所の体制となる。

「少年サポートセンターひろしま」は市から育成課非行防止・自立支援担当が 13 名、広島県警察から少年育成官 6 名と警察官 1 名の計 20 名の体制で、児相とも連携しながら①少年相談②居場所づくり③生徒指導上の課題を抱える中学校等への支援④街頭補導指導⑤非行防止セミナー⑥ネットパトロール等の活動を行っている。今回視察させていただいたのは②の居場所づくりで「少年サポートルーム」と名付けられ、非行等からの立ち直り支援を必要としている少年を対象に毎週木曜日、広島修道大学の学生ボランティアの協力を得て体験活動や学習支援を行っている。小学生くらいの支援を必要としている少年にとってお兄さんお姉さんに相当する大学生が関わる事と継続して支援していく環境が整っていることに感銘した。江戸川区内にも警察が設置している「江戸川少年センター」が存在しているが、区児相や教育委員会とも連携し、居場所づくり等の充実を図れると良いと感じた。

- 「少年サポートセンターひろしま」では、広島県警から出向している非行防止・自立支援担当課長から広島市内の非行少年の検挙・補導の実態や更生に対する取組みなどの説明を受け、同センターの主な活動は少年相談や居場所づくり、街頭補導活動、非行防止セミナーの開催、インターネットパトロールなどであり、最近は一旦は減っていた少年非行が再び増えてきている現状が紹介された。

そして当日は、非行に走ってしまった少年たちの立ち直りを支援する居場所作りの場面に立ち会うことが出来た。イギリス人講師が日英の文化の違いや観光名所などをユーモアを交えながら紹介し、そこに参加している複数のボランティアも場の雰囲気や自然に盛り上げるなどしていた。人間関係の垣根をとり、雰囲気を和らげることからコミュニケーションを図ることが重要である。

- 少年サポートセンターは警察の部内で少年警察活動規則により全国に設置が義務付けられているが、広島では平成 27 年 4 月から青少年の健全育成の活動に対する協定書を交わしたうえで市職員と警察が密接に連携して非行防止から立ち直り支援まで一貫して支援を行う取組みを全国初となる形でスタート。県内 3 カ所のサポートセンターが設置されている。

広島における非行少年の検挙や補導件数は一昔前に比べると減少傾向にあるが、物理的に少子化の影響が考えられるとのこと。また、現在では急激な物価上昇、賃金の実質低下や貧困のシワ寄せが子どもに押しがかかっているという現

状もあるようで、親が働くけど暮らしは楽にならない、思うようにいかない憂さ晴らしが原因の一つといった話を聞き、大島紬が主な産業であった奄美大島に於いて、その需要がなくなり親が職を失い、島内の子どもたちがみんな非行に走ったという当時の話を思い出した。政治的な責任、役割も大きいと思うが、究極な答えとして、様々な環境下にあったとしても、子どもの非行云々も親と一緒に原爆資料館を見て、いかに今平和な生活が出来ているかを知れ！とは、広島らしい印象的なコメントでもあったが、広島に限らずズバリである。

視察時センターで拝見した英語を使った自己表現ということで外国人講師を中心にコミュニケーションを図る取り組みをはじめ、様々な支援が行政、警察、地域の方、保護者たちと行われ、居場所としてのセンターもそこに存在していた。

- 江戸川区にも東部地域の墨田、江東、葛飾、江戸川をたばねた少年センター（都内には8か所）がある。センターの活動内容については今までは認識が不十分であった。視察では、広島のサポートルームの活動に注目した。

少年サポートセンターひろしまの活動内容を聞き、その後サポートルームでの学習会を参観した。2015年4月に開所し、少年の支援をワンストップで行い、市教育委員会とも連携している。主な仕事は、少年相談（不登校、たばこ、親の財布から現金・カードを盗む、家出、性被害、ネット依存など）、居場所づくり（少年サポートルーム）、中学校などへの支援、街頭補導活動、非行防止セミナー、ネットパトロールなど。

少年サポートセンター4階の「少年サポートルーム」では、子どもたちがボランティア（12名の学生が登録）とともに、講師（イギリス人）との対話を楽しんでいたのが印象的であった。ボランティアは、子どもたちのために熱意をもって取り組んでおり、とりしまりではなく尊重する姿勢、円滑なコミュニケーションをこころがけ、子どもの人権を大切にする姿勢はすばらしい。子どもたちにとって身近に信頼できる大人がいることは欠かせない。

広島市では青少年指導員（地区担当・市長が委嘱）を各学校（133校）に6名以内を配置し現在は741人。教員以外に子どもたちが頼れる存在は必要で、江戸川区も配置できる手立てを考えたい。

- 広島市の「少年サポートセンター」は、平成27年に全国で初めて市職員と警察が同じ拠点で机を並べる「ワンストップ体制」を導入し、非行防止から立ち直り支援まで一貫した対応を実現している。学校や児童相談所、地域ボランティア、交番などと顔の見える関係を築き、迅速で実効性の高い連携を行っていることが大きな特徴である。

具体的には、夏祭りや花火大会といった人出の多い場での街頭補導、商業施設前での軽微非行への早期対応、SNSやネット上での不適切行為の監視・注意喚起など、多層的な取り組みを展開している。子どもの自己肯定感を高め、信頼関係を築く支援を行うことで、再非行防止にもつなげている。行政と警察が同室で協働することで、通告から支援開始までの時間が大幅に短縮され、ケースごとにきめ細かな対応が可能となっている点は大きな成果である。

一方で、江戸川区にもすでに少年サポートセンターが設置されており、区児童相談所のすぐ近くに位置している。施設が近接していることは、現場対応を迅速に行えるという大きなメリットである。ただし、東京の場合は警視

庁の管轄下での運営となるため、行政との具体的な連携状況については十分に把握できていないのが現状である。今後は、江戸川区児相との連携がどのように機能しているのかを注視し、広島市の先進的な取組みから得られる知見を参考にしながら、地域に即した体制強化を検討していく必要がある。

(3) 姫路市における防災教育について（姫路市）

《視 察 先》

姫路市（市役所所在地：兵庫県姫路市安田 4-1）

〔姫路市の概要〕

- (1) 人 口 516,905 人（男 249,972 人 女 266,933 人）
- (2) 世 帯 数 232,783 世帯
- (3) 面 積 534.35 k m²
- (4) 予 算 額 2,582 億円（令和 7 年度一般会計当初予算）
- (5) 議員定数 45 人

《視 察 日》

令和 7 年 8 月 2 9 日（金）

《ひめじ防災プラザについて》

平成 19 年 4 月にオープンしたひめじ防災プラザは、総合的な体験を通して一人一人が防災の重要性を理解し、日頃から万一来ることができるよう、防災に関する知識と技術を学習することを目的としている。東日本大震災をはじめ全国各地で発生する自然災害、南海トラフ巨大地震への備えなどから、「地域防災力の更なる向上」及び「将来の防災リーダーの育成」を目的に、平成 26 年にリニューアルされた。

《委員・会派の所感》

- 総合的な体験を通して、一人一人が防災の重要性を理解し、日頃から万一来ることができるよう、防災に関する知識と技術を学習することを目的に開館したひめじ防災プラザを視察した。

館内は 3D 映像や振動等の特殊演出装置で災害体験ができるほか、地震直後の街並みや崩壊した部屋をモデルに災害直後の危険箇所や何をしなければいけないのか学ぶことができる。また、ゴールデンウィークや夏休みには子ども向けのイベントも行われており、楽しみながら防災について学べる施設となっている。

一般の人にとって防災についての見識というのは普段、日常生活している中では自然と深まるものではなく、何かきっかけがなければなかなか目を向けるものではないと考える。しかしながら、今後必ずくると言われている首都直下型地震、また本区の抱える水害への脆弱性といつ起こるかわからない災害に対して確実に備えなければならないという現実がある。

今後、人口減少とともに確実に行政側のマンパワーにも限りが見えてくることは明らかであり、住民一人一人の防災意識の向上がより重要になってくるで

あろう。そんな中であって楽しみながら防災についてふれられる環境の提供というのは大変に勉強になった。

- ひめじ防災プラザは「防災情報ゾーン」「災害体感ゾーン」「防災体験ゾーン」の3つのゾーンで構成され、防災に関する知識や技術など、体験しながら楽しく学ぶ施設であった。特に「災害体感ゾーン」は、日常ではなかなか体感できない数々の災害現象を再現し、災害のメカニズムと怖さが体感でき、私たちも体験させていただいた。

市民一人ひとりが防災の重要性を理解し、日ごろから万一来るべく備えることができるよう、防災に関する知識と技術を学習することを目的として小さい子供から大人まで防災意識が高められる素晴らしい施設の見学ができた。

また、独自にひめじ防災マイスター認定制度を設けて、市民の防災知識やスキルの向上に取り組んでいることは参考になった。

- 最終日はひめじ防災プラザに行き、防災に関する知識や技術などを体験しながら楽しく学べる姫路市の施設であることが実感出来た。

同施設は「防災情報ゾーン」「災害体感ゾーン」「防災体験ゾーン」に分かれ、日常生活では体感出来ない数々の災害現象を再現しており、たとえば地震直後の街並みや消火体験コーナーなどに触れることが出来るので、子どもたちにとって貴重な体験になると確信した。ホースから水が実際に出るリアルな消火活動には驚いた。また停電になったことを実感できる「避難体験コーナー」は中に入るだけで恐怖であり、足元の暗い中、出口までたどり着くのに時間が極めて長く感じた。

座学では「ひめじ防災マイスター認定制度」の説明があり、一般的な防災士とは異なる同市独自の防災に対する啓発活動の一環としてつくられた制度であることが分かった。地震や水害などの災害に強い地域防災力の向上を目指している他地域にないユニークな制度設計であると認識出来た。

- 姫路市の防災上の課題として、人口減少社会に突入し、近年の気候変動に伴う豪雨災害や台風、巨大地震など、大規模な対応可能な地域防災力の向上が喫緊の課題として上げられるようだが、姫路市も川に挟まれ沿岸部を持ち三方が水に囲まれた環境は地理的な違いはあるが本区と似た状況下であり、そうした課題とどう向き合っていくか対応策には共通項が多いと思う。

平成7年に発生した阪神淡路大震災以降、有事においては災害対応の司令塔として、平常時には市民への防災学習、啓発の場としての施設が必要ではないかと議会を含め多方面からの要望がきっかけとなり、姫路防災センターの整備がすすめられた。視察した1階のプラザは、知る、感じる、行動するという学習ステップに基づき3つのゾーンで構成され、①防災情報ゾーンで防災の基礎知識を知ってもらい、②3Dシアターのある災害体感ゾーンで災害の脅威を感じてもらい、③防災体験ゾーンで消火、避難、救護といった具体的な方法を体験し行動を学んでもらうというこれらの3つのゾーンを巡ることによって市民の方々が防災を知り、脅威を感じ、具体的な行動を学ぶことが出来る一連の学習体験を提供する施設となっており、この一連の流れで学習できることは非常に理解しやすく、興味深いものであった。

施設をリニューアルして小さいお子さんたちに人気となったが、中高生をはじめとした若者世代の来館を増やし、さらに市民の防災意識を高めたいということは、どの自治体においても課題として上げられることではあるが、いざと

なったら頼りになる存在として期待もされている。本区においても様々なことに若者を取り込み共に意識を高める取組みとして繋げていく必要性を思う。

- 姫路防災プラザでは、施設内容の説明の後、各コーナーで体験をしながら学ぶことができた。私も消火体験コーナーで炎に向けて水をかけて消火する体験をしたが、疑似体験は印象に残る。子どもたちは消防服を着て、消防自動車に乗って消火体験をする。災害体験コーナーでは、煙がでている暗い部屋の中から外にでるというもので、少し怖さを感じた。このような参加型の施設で江戸川区の子どもたちにも疑似体験をさせたい。

プラザの利用者は、コロナ時には入場者数は激減したが、最近は元に戻っているとのこと。今年4月から7月末までの100日間で、10歳未満が26.8%もあり、幼稚園保育園小学校低学年の入場者が多い。やはり、体験できる魅力が大きいと考える。大型バスの駐車場がないのが難点とのことであった。また、人気のあるインフルエンサーがこの施設を紹介したことから、親子連れの来館者が増えており、訪問者が口コミで宣伝する効果は大きい。

防災教育は様々な視点が必要であり、一人一人が命を守る行動がとれるように学校教育をはじめ地域での防災力も高めていきたい。また、区としてハザードマップの配付に続けて、防災袋（避難グッズ数点含む）の配付など、各家庭での備えをうながすことを提案したい。

- 姫路市の「ひめじ防災プラザ」を訪問し、消防局による防災教育・啓発の取組みについて説明を受け、施設見学を行った。同施設は阪神淡路大震災の教訓を踏まえ、災害時の対応拠点と平時の市民防災教育拠点という二つの機能を兼ね備えて整備されたものである。防災情報ゾーン・災害体感ゾーン・防災体験ゾーンの三段階の学習動線を備え、知識習得から体験を通じた実践力の向上まで一貫した学びが可能となっている。特に消火体験や煙避難体験、3Dシアターなどの設備を通じて、災害を「知識で理解する」だけでなく「実際に感じ、行動につなげる」仕掛けが整っている点は印象的であった。

利用状況としては、平成19年の開館以来36万人以上が来館しており、コロナ禍で一時減少したものの近年は回復基調にある。リニューアルによって低年齢層や親子連れの利用が増加し、家庭内への防災意識の波及効果を狙うという運営方針に合致している。また、学校教育との連携も強化されており、小学校社会科での「消防の仕事」に関連した見学や、中学の「トライやるウィーク」での職業体験、防災フェアや親子教室など多様なイベントを通じて防災意識を高めている。さらに、教員研修と連携した救命講習の実施など、防災教育を教育現場全体に根付かせる工夫もなされている。

このように、ひめじ防災プラザは市民が防災を自らの生活課題として主体的に学び取る拠点として機能しており、防災教育のモデルケースといえる。江戸川区においても、子どもから大人まで幅広い層に体験的に学べる機会を設けることは、防災力向上に直結する施策として検討に値すると感じた。

- ※ 報告書の作成にあたっては、広島県、広島市、姫路市提供の資料を参考にしました。